だんぼー　陽蜂　日本ボーイスカウト京都第38団　昭和55年７月18日発行　第２８号

第１１回団委員会報告

昭和55年７月８日㈫　定例　於団ルーム。20:00〜22:40

出席者－西村、中川、小川、橘、松本、五十嵐、多門、服部、永田、西脇、原田、末吉。

欠席者－＊黒宮＊小島、西山、園田、三田、河原。　出席率67％（＊78％）

※開会に先立ち19:00より、進級面接会を開催。１級－松本龍太郎君、２級－福永幹也君。山内隊長、鶴田副長、西村団委員長、小川・中川・五十嵐・末吉各団委員が参席した。（その他団会議報告の進級者は、くま－西脇、しか－宮谷・木野、うさぎ－西山・高橋。　珠算章－山岡。）

―― ※　協議・報告事項　※ ――

1　各隊夏季活動計画の承認

ＣＳ隊－８月14〜17日　京北町下宇津　安威昇宅　テーマ「燃えろ！山賊」
　７月23日説明会。８月10日点検。８月19日反省会。

ＢＳ隊－７月24〜27日　左京区大原大見町54　テーマ「築こう　われらのMy Home」
　７月10日説明会。同20日点検。同22日竹材切出し。同23日先発。

ＳＳ隊－７月30日〜８月１日　８月１日11:00金沢駅前ホテルニュー金沢前集合の移動キャンプ。
　キャンサー班－安宅の関の調査　30kmハイク　テーマ「小松市徹底解剖」
　スコーピオ班－水産・漁業の調査　22kmハイク　テーマ「海岸を歩く」

携帯パイプイスをＢＳ・ＳＳが全員そろえて購入することになった。これは、大Ｓ大会をはじめ、設営時間の短縮と資材の軽減のためということで、予算の都合上個人備品として個人出費でまかなうことになったが、予備の５脚については団備品として団で購入を決めた。

2　大谷スカウト大会資材輸送について

７月31日午後４時東本願寺京都教務所前に、参加各団の資材集結を求められている。そこまでの運搬車輛、人員の手配については、野営行事担当団委員がすることになった。育成会皆様のご協力をお願いいたします。また８月６日の資材返納についても同様。（時刻は未定）

3　北山地区ＢＳ特別委員会報告　（西脇）

京都キャンポリー北山地区大会が、８月23〜25日　滋賀県安曇川北舟木　滋賀県青少年湖畔リクリエーションセンターにて開催される。当団は「食料配給部」を、19団、41団とともに担当することになった。　この件に関する援助奉仕は、ＢＳ育成会で協議することになった。　（総数333名分）

4　育成会会則の制定について

会則案の配布検討並びに、各育成会で説明の上検討され、意見、異議がなければ、予定通り施行することになった。まず、役員選出規定に則って活動を始めるわけだが、各育成会で早い目に選出されるのが都合がよいと、話し合った。同じく、隊長、副長の選任について作業すべく、指導者養成担当で選任準備をすることになった。

5　団名誉会議の開催について

団内スカウトの名誉にもとる行動について、話し合うため、各隊長と、団委員長、小川先生、服部、末吉団委員による、名誉会議開催の承認をした。（７／16　予定）

6　地区報告

指導者講習会９／13〜14。日赤救急法講習会９／17〜10／３の８日間。（1,700円）

7　予定日程

第12回団委員会	－８／12　㈫。	
第９回団会議	－８／26　㈫。	
第13回団委員会	－９／２　㈫	新旧合同
上進式	－９／６　㈯	
団育成会総会	－９／27　㈯	

欲しい人、あげたい人、集まれ!!
＊スカウト・ユニフォーム、リュック等のスカウト用品に限ります。
＊期間　７／１〜８／31まで。
＊連絡先　ＲＳ松原へ。℡231-9552
ローバー隊・リサイクル委員会より

広中平祐の青年教室

第四章　芸術は万人の中に

☆感動を再現する「表現」

芸術についてたずねられたとき、当然ながら「表現」ということを考える。私は芸術家でも評論家でもないが、近代数学の発展の中で、表現論が大きな役割を果たしてきたことを知っている。芸術による表現とは一体、何だろう。

人間は、さまざまな体験を通して感じとったものを心の中にたくわえ持っている。はっきりと意識的に学びとったものもあるが、ほとんどは日常生活の中で無意識のうちに感じとる。感じたという事実は確かでも、それが何であるか、なぜそう感じたのかは説明できないことが多い。世の中の事件、人との出会い、自然の中での発見、いろいろの状況の下で、あるときは強烈な実感として、あるときはぼんやりと抽象された感想として受けとめる。喜び、悲しみ、美しいもの善いものに対する感動。計り知れないほど多くの体験が頭の中で象徴化され、抽象化され、類似と関連を繰り返して成長していく。

それは、そのままにしておけば極めて漠（ばく）然としたものだが、それをよりはっきりと意識できる形で、つまり、自分にも、他の見る人、聞く人にも感動をよびおこす形で、もう一度再現してみるのが「表現」である。

数学の表現論でも、抽象化された概念に具体的な表現を与えることによって、その特性が浮き彫りにされる。表現には、取捨選択のあとの明確な「象徴化」があり、抽象を具現する「実現化」がある。そして人間の感情とか感覚を、音、色、形によって表現する芸術作品には、かなりはっきり評価できる「技術」の側面と、技術を超越した「心」の問題がある。この心の問題は、当然ながら、心と心の共感の問題であり、鑑賞する側によって観点も程度もまちまちで、なかなか捉（とら）え難い要素を含んでいる。

☆興味深い美の科学的研究

その意味で、美の構造を科学的に捉えようとする研究は興味深い。例えば、高性能のコンピューターを駆使し、数学の構造感覚とか物理学の概念などと照らし合わせて、芸術作品を分類したり、美の型と度合いを客観的に数量化する手掛かりを求める学者がいる。音楽にはリズムとテーマの変形が、さまざまな周期性（スペクトラム）をもって重なり合い分布しているが、その分布の型を統計学の理論で分析する研究もある。また絵画に感じられるポテンシャル（力量）の特性と分析の構造を調べる研究もある。この場合のポテンシャルには、色彩の濃淡、曲線の複雑度、線と色の明確度（とあいまいさ）、局所的な形の安定（と不安定）の度合いなどが考えられる。さらにポテンシャルの分布状態から大局的構造の均整、全体的な印象の強弱を計ろうとする試みもある。

こういった研究が発展すれば、やがて作品評価の一つの目安として使われたり、新しい芸術の可能性をさぐる踏み台になる可能性がある。

しかし、芸術には、その出発点であり背景である何か目に見えない部分、または感じることはできても説明できない部分が、永久に残るだろう。朝めざめて昨夜描いた作品をながめ、「これほどの作品を、どうして自分が創（つく）ることができたのだろう」と、作者をも乗り越えた作品自体の神秘性に感じ入った画家がいた。芸術に限らなくとも、人間の作業には多かれ少なかれ不可思議の要素があるから面白い。

☆プロの特権ではない

すべての人間の作業には表現の喜びがある。芸術的に表現することの喜びは、その道のプロだけの特権ではないはずだ。人間の見ない部分、自然の中の、ふだんは気がつかない部分にはめこまれているものを、文字に、音に、絵に表現してみる喜びは、だれでも味わえる。つのる不安、たまった不満も文章に表現できる。うれしいこと、悲しいことを詩に表し、音楽に託して表現することで、喜びを深め、悲しみを乗り越えることも可能である。仮にそれができなくても、表現すること自体の喜びは残る。音楽に合わせて自分の心を歌い、踊って自分の体の動きを楽しむ。コーラスに加わって皆との共感を歌い、共に歌うことから新しい共感が生まれる。カラオケ・ブームにも郷土祭のブームにも、表現の喜びという観点からみれば十分に意義がある。プロの芸術家にとっても、表現の喜びは芸術の基調だと思う。

私は、ある教団を訪ねて（人生は芸術である）という教祖の言葉を知って感動したことがある。日々の仕事の中で、余暇の遊びの中で、人間の意識下にためこまれたもの、隠された自分を、意識的に捉えて、はっきり表現してみたい。そうすることによって、次の体験に対する新しい認識が生まれ、新しい進路が開けてくるはずだ。

自分の人生は他人から頂くものではないし、他人から買い取れるものでもない。自分の人生は自分で創造するものであり、その創造の喜びは、芸術家のそれと同質である。創造していく人生の喜びを（人生は芸術である）と表現しているのだと私は思った。

すべての人が日常の生活を通して芸術的な活動をしているのだといったら過言だろうか。プロの芸術家でも、何らかの形で、芸術家と呼ばれない多数の人たちの日常的な活動から強い影響を受けている。絵画でも音楽でも、作品の中に、作者が生まれ育った郷土の自然とか国民的な伝統とかの影響が、ありありとみえる。表現技術は外国から学んでも、芸術家自身の中に蓄積されたもの――技術以前の何かが創作の動機となっている。

大勢のお坊さんがお経をあげているのに耳を傾け、その抑揚とリズムと多様なピッチの複合に魅せられて、交響楽を発想したという黛敏郎さんにしても、日本的な田舎の風景の中で竹藪（やぶ）を吹きぬける風の音を思って、尺八を織りこんだ管弦楽を作曲したという武満徹さんにしても、われわれ日本人の宗教観と情緒を作品の中に結晶させている。

☆すべての人が創造に参加

私の限られた交際範囲の中で、芸術について語り合い、いつも深い感銘を受けている画家がいる。ハーバード大学でグラフィック・デザインを指導している片山利弘さんという人だが、彼が日本人とアメリカ人の芸術感覚の違いを、相撲とボクシングの対比で説明してくれたことがある。

ボクシングは、ゴングが鳴ると同時に、力いっぱい、たたつづけに殴り合うが、相撲には間（ま）がある。仕切りで何度かにらみ合って対決前の盛り上がりをつくる。立ち上がっても、組み合って、じっとして動かないときがある。そして、ためておいた全力を尽くして、パッと技をきめる。相撲にみられる緊張感のみなぎった静止とか、一転した動のあざやかさは、日本独特の舞台芸術である能にもみられる。

日本の国民的特徴は、すべての日本人が集まって作ったものである。その特徴がプロの芸術家にいつのまにか吸収され、その一部は芸術の創作によって表現される。また逆に、プロのつくる芸術が逆流して、一見、芸術とは関係がないと思われる人たちの生活に影響する。早い話、相撲にしても、そのための独特の建物、飾りつけがある。やぐらダイコの音にも、力士のまわしのデザインにも、日本人の芸術感覚が入る。それを観客の芸術感覚が支えている。芸術は、すべての人が大なり小なり関与して、創造されていくものである。